

# 社会を明るくする運動

## 犯罪や非行を防止し、 立ち直りを支える地域のチカラ



高野推進委員長



黄色いハンカチの装飾

### 《社会を明るくする運動とは》

すべての国民が犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ犯罪や非行のない地域社会を築こうとする全国的な運動です。

この運動は、東京・銀座の商店街の有志の方々が非行の予防等を広く訴えるために昭和24年に開催した「銀座フェア」をきっかけとして、昭和26年に始まりました。その後、法務省の主唱により毎年7月を強調月間として全国で展開され、今回で60回目を迎えます。



## 7月17日(土)に中央大会 『区民のつどい』を開催しました。

豊島区では、社会を明るくする運動の趣旨を広くPRするために、毎年強調月間の7月に中央大会「区民のつどい」を開催しています。第60回を迎える今年も、第2部の特別ゲストとして映画監督の山田洋次氏をお招きし、映画作りや映画にまつわるエピソードなどをお話しいただきました。

そのほか、区内12地区の青少年育成委員会を中心として、各地区でPR活動を実施しています。

### 第1部

今年度も「命」を題材として作文コンテストを実施し、中央大会では受賞者の表彰式並びに優秀作品の発表を行いました。

今年度、優秀賞に選ばれたのはいずれも女の子でした。楽屋裏では「こういうの初めてなので緊張する…」と自信なげに話している声も聞こえましたが、作文の発表では堂々と自分の作文を読み上げていました。

小中学生が真剣に「命」について考え、そのことを自分の言葉で会場に伝える様子に、会場ではハンカチを取り出す姿も見受けられました。



山田洋次監督

### 社会を明るくする運動にご協力頂いている団体(順不同)

(寄付金)

藤久地所管理株式会社	宗教法人 祥雲寺	東京商工会議所豊島支部
ビー・エム・ワーク藤和	宗教法人 西福寺	豊島区商店街連合会
株式会社 藤久不動産	宗教法人 高岩寺	豊島区民生委員・児童委員協議会
一般社団法人 樂囃庚申堂奉賛会	宗教法人 眞性寺	(寄贈)
株式会社 アール・エス・シー	豊島西ライオンズクラブ	東京都薬物乱用防止推進豊島地区協議会
株式会社 サンシャインシティ	豊島区保護司会	樂囃信用金庫
株式会社 東武百貨店 池袋店	豊島区保護観察協会	東京信用金庫
東京信用金庫	豊島区町会連合会	

### 「第60回社会を明るくする運動」の 行動目標・重点事項

《行動目標》

- ① 犯罪や非行をした人たちの立ち直りを支えよう
- ② 犯罪や非行に陥らないよう地域社会で支えよう
- ③ これらの点について、地域社会の理解が得られるよう協力しよう

《重点事項》

「立ち直りを支える取組についての理解促進」

### 第2部

本運動の常任委員長の仙浪氏を水先案内人として、山田洋次監督のトークショーを行いました。

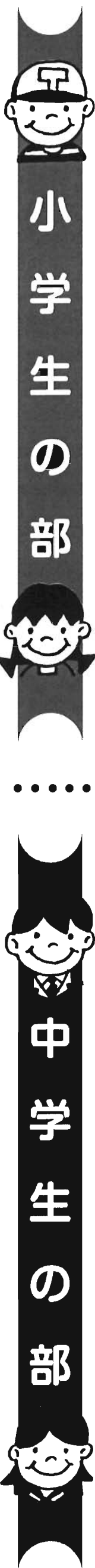
社会を明るくする運動のシンボル「ヒマワリ」が沢山飾られる中、本運動の推進委員長である高野区長から「今日は社会を明るくする運動にちなみ、黄色いシャツを着て来ました。ハンカチも黄色です。」という挨拶があり、なごやかな雰囲気の中、第2部がスタートしました。

トークショーでは、監督の生い立ちから、映画「男はつらいよ」にまつわるエピソードや黒澤明監督との交流などを、時には笑いを誘う内容でお話しいただき、予定の1時間があっという間に過ぎてしまいました。

映画作りにおいても、チームワークや人と人との出会い、人と人とのつながりをとっても大切にしているということが伝わってきました。そして、時間の都合で紹介できなかった「家族も地域も意思的に生きることが大切。一緒にやっという意思があるからこそ、いろいろな問題を解決していくことができる。」という監督からのメッセージは、社会を明るくする運動の「地域のチカラ」に通じるものです。

最後に会場から質問を受け付けた際には、将来映画監督を希望しているという大学生からの質問に「君とはもっと時間をとってゆっくりと話をしたいなあ。1日でも話をしていたいなあ。」と言って、会場を沸かせてくださいました。

小学生の部  
作文コンテスト受賞作品



推進委員長賞 「尊い命」

昨年の十二月、お姉ちゃんが学校からサケの卵をもらってききました。春に川に放流するまで家で育てるのです。

サケの卵は、まさに『イクラ』そのものです。よく見るとオレンジに光る卵の中に黒い目があり、キョロキョロと動いています。

次の日水そうをのぞいてみるとほとんどの卵がふ化し、シラスそっくりのあかちゃんサケがすき通ったオレンジの卵をおなかに付けてゆらゆらと尾びれをふるわせていました。

昨日まで、ただの『卵』だったのに一日で魚らしく変化し私の気持ちも変わってきました。残念なことに、いくつかの卵は白くにごり固くなって、ふ化ができませんでした。よけいにふ化できた赤ちゃんサケが、かわいらしく大切に育てたいと思うようになりました。

『命』が少し分かった気がします。命は、与えられたもので、自分の力だけでは、どうにもならないものだからこそ、感謝しなければならないのです。「産まれてこられた」それだけでもすごいことだと気がつきました。

白くにごって固くなった卵を私は、庭の桜の木の下に埋めました。

サケの赤ちゃんは、日に日に大きくなっておなかに付いていたイクラのような卵もほとんど目立ちません。

いよいよエサをあげ始める時になりました。今まではおなかに付いていた卵から栄養をもらうことができたのですが、今度は自分からエサを探し、食べなければ生きていけないのです。

エサをあげるうちに気がついたことは、大きくて強そうなサケがいち早くエサにありつくことです。エサに食らいつく迫力は、まさに生きようとするエネルギーなのかもしれません。命を与えられた生きものは、生きることに百パーセント本気を出さなければいけないのです。生きてくても、生きられなかったサケの分までがんばってほしいです。

ただ、人間の場合はちがってきます。強いものは弱いものを助けてあげなければならないからです。それが『思いやり』だと思いました。まずは、近くにいる人が困っているときに、スツ

推進委員長賞 「生きてるってすごい事」

二月十四日、バレンタインデー。私の誕生日パーティーは、その二日後。私は友達を呼んで、どんな事をしようか、授業中ぼんやりと、考えていた。

いつものように、家に帰宅すると、家の様子がおかしかった。お父さんが真剣な顔で、私によって来て、こう言った。「今から、病院に行く。お母さんがたおれた。早く着がえて来なさい。」と。私は、全く訳がわからず、頭が混乱しました。急いで、着がえて、お父さん、お姉ちゃん、お兄ちゃんまで、病院に向いました。私は、まだ誕生日パーティーの事を考えていて、うきうきしながら病院の中を歩き、ロビーに着くと、お医者さんが待っていました。机の上に数枚の紙を置いて先生は説明を始めた。そこには、手術の方法が二種類書かれていました。

そして、その紙の一番上に、クモ膜下出血と書かれていました。私は、このクモ膜下出血とは、どういうものだろうと、思いながら、お医者さんの説明を聞いていました。少し、大変な事だとわかりました。でも、二日後の誕生日パーティーはできるだろうと。まだそれくらいに思っていました。しかし、そんな簡単な事ではなかったのです。

数時間後、お母さんがストレッチャーで運ばれて来ました。お母さんは、酸素マスクをして、意識がないような状態でした。私は、お母さんの手を取ると、たくさんの涙が、私の目からこぼれおちました。そして、このお母さんの体の中でおきている事は、大変な事だと実感したのです。

どれくらい待ったのだろう。気がつくと、8時間程経っていました。お母さんが手術室から、出てくると、ICUという命の危ない人が入る病室に連れて行かれました。小学生は、ICUに入れないので、私は、一人ぼっち、ロビーでずっと泣いていました。そこに看護師さんが来て、「手術は上手くいったから大丈夫だよ。」と教えてください、「お母さんが死んでしまう。」と思っていた私は、ほっとする事ができました。

次の日、お父さんが、頭には、チューブが三本刺さって、顔が真っ赤にはれて、目があきそうにない事などを説明してくれました。私は、二日前にはあんなに元気で体を動かせたのに、病気のせいで、こんなにも人は変わってしまうものなのかと、思い知らされました。

お母さんが退院する事になりました。また、お母さんと生活ができる

池袋第二小学校 5年生  
むらこし ももこ  
村越 萌々子



手を貸すことができるようになりたいです。

それから数日後、水そうの中で変わった動きをしているサケを見つけました。くるくると回転しながら、まるで苦しげにもがいているのです。それからしばらくすると、水そうの下に横たわりかすかにエラだけが動いています。水そうを少したたくと、また回転を始めますが、やっぱりしずんでしまいます。私は苦しげなサケをまだ生き続けさせるか、早く楽にしてあげるか迷いました。決心して、弱っているサケを網ですくってティッシュの上にそっと置きました。

私は、庭の桜の木の下に埋めました。

残ったサケ達はいつものように力強く泳いでいます。

春になって、本当の川に放流されたとき、この元気なサケたちも一生懸命生きていかなければならないと思いました。

「尊い命」というけれど、命をもらった私達が尊いものだと気がつきました。

だからこそ、自分の命も心も、友達の命も心も簡単に傷つけてはならないのです。

尊い私達だからこそ。

作文コンテスト 小学生の部 受賞者

▼作文コンテスト 中学生の部 受賞者



千登世橋中学校 1年生  
いとう たから  
伊藤 天来

事が、私はとてもうれしかった。しかし、退院して二日後、感染を起こし、また入院手術する事になりました。お母さんは、手術のために、丸坊主になりました。私は、お母さんが、坊主になる事よりも、入院を続ける事で、体が弱って、やせ細っていく事が心配でした。もう歩けなくなるのではないかとも思いました。でも、リハビリによって、お母さんは元気になり、やっと再び退院する事になりました。

私は、お母さんの病気を通して、命はとても大切なものだと、実感しました。今、一緒に食事をしたり、楽しく会話したりしている人が、何の前ぶれもなく、いなくなってしまう事もある。何気ない日常でふれ合った人々が急な事故で、命をなくしてしまう事もある。今の瞬間はかけがえのないものなんだと深く感じました。

よくテレビで、テロ事件や、自殺や、殺人など、人の命に関わる報道を見ても、今までは、何も思っていませんでした。しかし、この経験をして、人の命をうばったり、自殺をしたり、たくさんの人たちを傷つけたりする事は絶対に起こってはいけないと思うようになりました。人の命を奪うのは、最低な行為です。それによって命だけでなく、その人の夢や希望や可能性なども奪い、多くの人が悲しみに包まれる事になるのです。自分の大切な人がいなくなった時の気持ちをわかってほしいと思いました。自殺は、身勝手な行いです。自分が死んでもだれも何も思わないというのは、まちがいです。必ず、悲しむ人が大勢いると思います。もう一度、落ちついて、自分の周りを、見渡して、考えてほしいと思いました。どんなに生きていたいと思っても、命がつかってしまう人もいるのです。そして、世界には、食糧がなくて、死んでしまう人や、風邪を引いても薬が手に入らず死んでしまう子供達もいるのです。そんな中国は福祉も医療も、十分とは言えないけれど、国から、援助してもらえます。一日一日をとにかく生きていく事が、私は大切だと思います。私はお母さんの病気を通して、普通の生活ができる事は、すばらしいと思いました。まさに奇跡です。

自分が生きて存在している事が、どんなにすばらしい奇跡なのかという事を、日本人、そして世界の人に気づいてほしいと思います。

常任委員長賞 「

よく、駅や人通りの多い車いすに乗っている人を見かけたらちゃんと歩いているか、道が認めてから「大丈夫ですか。」と、進んでその話を聞きます。私は母に一つ質問の。すると母は「はずかしくルバーの資格をもっているから

母は、ガイドヘルパーの学しながら電車に乗ったり、大きいアイマスクをすると前が見えないようです。大きい音なんかしたったそうです。こういう経験のずい出来たのだと思いました。声もかけられないと思いました

また、私の母は病院で夜勤をしています。夜勤では、ほとん動けない。一人でこ



常任委員長賞 「

この世界には何億人もの命がわれている…。そんなこともまだ会い「命」というもの“助けようならない出来事がある。

小学二年生の夏のことだったで下校している時だった。人通かすかに動いていた。近づくにつれたのだ。「あ、子猫だ!!」最初が「かわいいね」「あっ本当だあを立てて近づく、そして猫の異変をうたがった。「目が…目が開いての小さなまぶたにはビッチリと目やているかのようだった。だが、そはやせほそり、ふるえていて、とんなもやはりその気持ちが強く、った。

私たちのとった作戦…というよにいろんな物を持ちよったことだ。のあいだに残りはいそいで帰宅し子供ながらの精一杯のことであらないタオル、それからミルクや、ミルクやちりめんじゃこは食べさせ役にたったものはダンボールとタ子猫を入れ、みんなで相談している人もいなければ、お金も持てることさえできない。自分たちのうたの?」後ろから男の人の声、っていた。

「えっ!?それは大変だ!」理由して、「よし、動物病院に連れてきて喜びが入りまじった顔をする。

# 助け合い

池袋第二小学校 6年生  
高橋 千穂



所で白じょうを持った目の悪い人や、  
ます。そういう人を見かけると母は、  
分からなくなっているかどうかを確  
や「何かお手伝いできる事はあり  
人たちに大丈夫かどうかということ  
問をしてみました。「はずかしい  
なんかないよ。それに私はガイドへ  
うね。」と答えました。  
校で資格をとるためにアイマスクを  
通りを歩いたりしたそうです。そこ  
くて大きなかべがあるように感じ  
たらこわくて足が動かなくなってい  
積み重ねがあったからはずかしが  
。私だったら、周りの目を気にして  
。協や産婦人科の先生のお手伝いを  
んどの人が寝たきりでトイレに行け  
まんも食べられない。ましてや、車



いすに乗ることも出来ない人が多いので夜勤は大変です。まず、  
午後の四時半から朝の九時半まで夜勤は続くのですが、もうそ  
こから時間との戦いだそうです。四時半から九時半まではいそが  
しくて、休んでいるひまもないのですが、特にいそがしいのがお  
むつの交換です。これは三時間に一回やらなくてはいけないの  
です。しかもいる人は約五人くらいで、夜勤をやっている人は三  
人なのでとても大変だそうです。それにナースコールなんて聴り  
っぱなしだし、ご飯もぐちゃぐちゃにしてしまうそうとても大変だ  
なと思ったけれど、母は「大変だよ。でもね、前に先ばいと言  
ってただけど“たった一分でも愛情をこめて接してあげると思  
いが伝わるよ”って教えてもらったから私は、その人たちに尊敬  
しながらいつも仕事をしているよ。」と言っていました。あと「自  
分もいつかそうなるんだから順番なんだよ。今はその人たちのお  
世話を一生懸命しているよ。」と言って私は「そうか、順番なん  
だね。」と、とても納得しました。それから母がとてもがんばって  
いるんだということがとてもよく分かりました。

もうひとつの方の仕事は、産婦人科です。母はおもに、赤  
ちゃんに異常はないレントゲンで調べる先生のお手伝いです。  
今は赤ちゃんを産む病院が少なくなってきているからこの病院に  
もたくさんの方が来ていそがしいそうです。でも中には、はずかし  
い、行きたくない、と思う人もいますから、安心して診察が出来る  
ような気配りをしているそうです。

夜勤も産婦人科のお仕事も、その人たちの家族が心配して  
いるのだからしっかりお世話をしあげようと思ったそうです。  
それから家族だと思えばよければいそがしいと思えました。

私もいずれ赤ちゃんを産んだり、年をとって一人で歩けなくな  
る時が来るかもしれないからみんなと助けあって生きていくのが  
大切だと思えました。

# 「思いやる心」

池袋第二小学校 5年生  
河西 美紅



私は、ゴールデンウィーク中に家族とおじいちゃんと、おばあちゃんと旅行に行きました。その時のことについて、お話しします。

秩父鉄道の電車は観光客ですごくこんでいました。すると、座っている人が、おじいちゃんに「どうぞ。」と席をゆずってくれようとしたのですが、おじいちゃんは「ありがとう。でも大丈夫です。」と言ってそのまま立っていました。私は、おじいちゃんにゆずってくれようとした人は、声をかけて、えらいなと思いました。

そして、電車をおりてホームの階段をおりると、白いつえを持った目の見えない女の人がまよっていました。すると、私のお父さんがその女の人のところに行って、やさしく「どこに行かれますか。」と言いました。その女の人は、「急行に乗りたいです。」と言いました。そして、私のお父さんは、その女の人のかたどうでを持って急行列車が出るホームの階段の下まで、ゆっくりと案内していききました。

それを見て私は、お父さんはとても勇気があるなと思いました。なぜ私がそう思ったかと言うと、本で一度読んだことがありますが、多くの日本人は、心の中では声をかけようと思っても、なかなか勇気がなくて声をかけられないのだそうです。目の見えない人とはかぎらず、赤ちゃんがいる人やけがをしている人や年寄りの人に対しても同じです。一方、外国の人は、このような人々を見かけると、あたり前のように声をかけてたりしているそうです。

私は、日本の人も外国の人と同じくらい、勇気を出して、自分から、声をかけたり手を差し出したりすれば、日本の目の見えない人やこまっている人の気持ちが楽になると思っています。それから、手を差し出してもらった人はえんりよせずに、その気持ちを受け取ってくれるといいなと思いました。私は、もっと人の気持ちがわかって思いやりのある世の中になってほしいです。自分は、こまっている人の役に立てる、とても勇気のある人間になりたいです。

そのためにまずかんたんことから始めたいと思います。例えば、車いすの人やベビーカーで赤ちゃんをつれた人がエレベーターに乗ろうとしていたら、エレベーターのとびらを開けておいてあげたり、何階におりるかを聞きその階のボタンをおしてあげたりしたいです。また、電車のいすに座っている時にお年寄りや赤ちゃんがおなかにいる人がいたら、先に立って「どうぞ。座ってください。」と言って席をゆずりたいと思います。

みんなが、このような小さいことでも、ひとつひとつ始めれば、いつか大きな「思いやる心」になって世の中がもっと明るくなると思います。

# 小さな命を救うために

駒込中学校 2年生  
柳本 つぼみ



「あり、そして一日いくつもの命がうしな  
わからなかったころ、私は小さな命と出  
ととする力」を実感する絶対に忘れては

、とても暑かった一日を終えて六人ほど  
の少ない道に黒くて小さな物が遠くで  
つれてそれがなんなのか、ようやくわか  
こ気付いたのは私だった。するとみんな  
!」といって子猫の方へバタバタと足音  
に私達はすぐに気付いて足を止め、目  
ていない…。」本当におどろいた。子猫  
りがついていて、まるでのりでもぬられ  
れだけではなかった、鼻水もひどく、体  
てもかわいそうでしかたがなかった。み  
「なんとかしてあげよう!!」という事にな

り、やったことというのは、子猫のため  
だれか一人から二人見はりを立て、そ  
て家から何かを持ってくるという小さい  
ら。持ってきたものは、ダンボール、い  
ちりめんじゃこなどといったものだった。  
ることが目的だったが食べてはくれず、  
オルだった。ダンボールにタオルをしき、  
いた、これからどうするかを。子猫をかえ  
いがないので病院にも連れて行ってあげ  
無力さにみんなが悲しくなってきた。「ど  
がして振り返ると新聞配達らしき人が立

話をするとそんなふうになってくれた。そ  
「行こう!」と言いだした。みんなおどろ  
そして一人が「…でも私たちお金持っ

てないですけど…。」するとニコリ笑って「いいよ。僕が出してあげるから、さあ、はやく行こう!」みんな喜び、ありがとうございます!と何度もいった。私もうれしいけれど不思議だった。あの人からすればただのノラの子猫、それを近所の子供がさわいでいるだけ、べつに助けなかったからといってあの人困るわけでもない。でもあの方はダンボール箱を持って動物病院まで走ってくれた。必死になって走ってくれた。

近所に動物病院があるのは知っていたけど入るのは初めてで、少し葉臭かったのを覚えている。子猫を見て獣医さんは、キッパリといった。「この子猫の命はもって、一週間でしょう。」何もいえなかった。信じられなかった、そんなすぐ死ぬなんてウソだと、そう思った。何人が泣きだしてしまう子猫もいたけど私は泣かなかった。だってどうして助けられないの?と思った。お医者さんならなんでもおなせる、そう思っていたから。命はもつじょうぶで、かたくて、こんなもろくてはかないなんて知らなかったから。そのあと獣医さんはよくわからない名前注射を二本うってくれた。お金を払おうとした時、首を横に振って、「お金はいいです。」といってくれた。この子が少しでも長く生きるための注射です。だからいいとい

った。  
けつきよく病院を出て、もとの場所にもどすことになった。いい人に二人も会うことができ、何もしないよりはマシだろうけれどやさしくて悲しくて泣きながら歩いていた。何か車が通った、一台の車が止まった。その窓から顔を出したオジさんは心配そうに声をかけてくれた。理由は話したけど、どうにもならないと思ながら。だが、ちがった。「もしよかったらその猫、オジさんの家にひきとっちゃだめかな?」耳をうたがった。けれど本当だった。そのオジさんはやさしく笑って「一週間なんて短い命なのに、道なんてかわいそうだよ。」といって子猫をなでて、車にいれてはしりだした。私は思った、この世界は私達が思っているよりも愛があふれていると、小さな命のためにみんなが協力してくれた。小さな命を救うためにみんなが必死になってくれた。今日の事は絶対に忘れない。

きっと今もだれかがだれかのために、なにもかもほうり出して、必死に助けようとしている人がいるだろう。消えてほしくない、命のために、小さな小さな、命のために…。

# 「本当の幸せ」

千登世橋中学校 1年生  
中野 虹



本当の幸せとはなにか考え始めたのは、十月二十五日、兄が亡くなった時からでした。それまで私は、お金があつて、好きな物が買ってもらえる。そんな事が幸せなのだと思っていました。でも、それがまちがいだという事に気が付いたのは兄を亡くした時からでした。

私の兄にはすばらしい所が沢山ありました。  
まずは、笑顔です。いつでもどこでも兄は、あたたかくて、やさしくて太陽のような笑顔をたくさんの人にふるまい、勇気を与えてきました。それは今でも同じです。兄に、お線香をあげに来た人達がみんなそろって、「空君は本当にいつも笑っていたね。この写真のまんまだね。」

と、いえないを見ながら言って帰ります。それを聞いて、私は兄とずっと一緒に居すぎて気が付かなかったけれど、こんなにあたたかくやさしい笑顔を持っている人はそうそういないし、そんな人が自分の兄であった事。その事がまず一つ目の兄のすばらしい所です。

次は、誰とでも友達になれるその心の広さ、やさしさです。私達は、「あの人がいいよ。」「あの人が嫌いだ。」と人を傷つける言葉を必ず少しは言っていると思います。ただ兄はそれを全く口にしませんでした。だから兄には友達が多いのだと思います。又、兄の性格が本当によく分かったのは、お通夜の時です。参列して下さった方の人数がすごく多くて、隣のビルをとりまいてしまうぐらいだった事です。あの人数は十二才の子のお通夜には思えないぐらいだと大人の人達が口々に言っていました。普通に生活していたらあんなに沢山の人は来ていただけなかったと思います。私も兄を見習い、沢山の友達を作りたいと思います。

三つ目は、想像力・文章力です。私の兄は、とても想像力が豊かで、自分の考えたキャラクターで本を書いたりしていました。ただ兄が生きている間にそのすばらしさに気付かなかった事がすごく残念です。兄が最後に書いた詩にこんな作品があります。それは「泣かないで!」という作品です。その作品は、一人が笑うと世界が明るく楽しくなるから、みんな笑おう。そんな兄らしさのこもったすばらしい作品で、多くの人の心に勇気を与えています。兄は、生きていても、亡くなっても人に勇気と希望を与え続けています。

最近、ゲームなどの影響もあって、「死ぬ」「殺す」「死んだ」などと人の心を傷つける言葉ばかりが耳に入ってきます。そういう言葉を口にする人には、「本当にその人が死んでも平気なの?人を傷付けてなにが楽しいの?命はそんなに簡単に捨ててもいいものなの?」と問いかけてみたいです。その人達は、人の命を大切にするという事に対しての考えが甘いと思う、自分に不幸がおこる前に今の幸せについてもっともって考えてほしいです。一つだけの大切な命だから。自分の大切なものを失う前に、今、自分が生きている事の幸せに気付いてもらいたいです。又、自分の周りにもあるものがいつなくなってもおかしな状況の中で、今日まで一緒にいられた事が奇跡的だということに気付いてもらいたいです。兄が今も元気で、一緒に生活していたら気が付かなかった数々の事。兄が命がけて伝えてくれた数々の事を無駄にしないようにしたいです。今も私が元気に、友達と楽しく生活出来ているこの時間こそが、「本当の幸せ」なのだと思います。この事を教えてくれた兄に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとう。これからも、兄の分まで命を大切に生きていきたいです。





### 「命をつなげる心」

椎名町小学校 6年生  
みかさ れおな  
三笠 玲緒菜



平成22年4月27日男の子が誕生しました。名前は、「碧空」と書いて「そら」と呼びます。私のいとこです。

去年の秋、おばさんが、お腹の中にある赤ちゃんの写真を見せてくれました。まだ、手や足などよくわからなかったけど、おばさんは、うれしそうに、見せてくれました。私は、そのとき、おなかあまり大きくなってなかったので、本当？ 私にいとこができるの？ などと、まだ信じられませんでした。私には、弟や妹がないので、赤ちゃんが、つまり下の子が、できるということは、考えられなかったのかもしれない。

でも、今、いとこが産まれてからは、意識が、変わりました。

今年に入って、おばさんが病院に行く回数が増えてきました。入院することもありました。一月頃には、ベビー服や、赤ちゃん用のおもちゃが用意され始めたので、「ああ、私にもとうとういとこができるんだ。」という、ワクワクした気持ちと、心の奥には、ドキドキした気持ちもありました。ドキドキは、少し切ないような気持ちも交ざっていました。それは、今思えば、やきもちに似た気持ちだったのではないかと思います。

そして、出産予定日が決まりました。予定日が近づくにつれて、私は「赤ちゃんが産まれたら、わがまま言ってもらえない。もう少し、大人にならないといけな。」と、思うようになっていました。その頃から、あのドキドキした気持ちは少しずつ消えていきました。

二月の前半、長く入院しそうだという、おばさんは病院に出かけて行きました。予想通り、産まれるまで、入院することになりました。私は、その日に、おばあちゃんとお見舞いに行きました。おばさんが入っている部屋は、出産し終わって家族と面会する部屋でした。その日は、こんでいて、緊急入院するための部屋が空いていなかったそうです。

おばさんが、少し、ぐったりしていました。横で、おばあちゃんが頑張ってねと勇気づけていました。苦笑しているおばさんを見るとなんだかとても心配になりました。でも、私には、何をすればいいのかわかりませんでした。家に帰って、私にできることはないか、何をすれば喜んでくれるか、考えました。なかなかいい案が浮かびません。あれこれ悩んでいると、おじさんが「メールを送ってあげたら？」と、言ってくれました。私は、すぐに、メールを打ちました。どんな声をかけたいのか、頑張ると言いたいのか、考えながらメールを打ちました。

次の日、おじさんが、「メールありがとう。うれしくて泣いていたよ。」と、言ってくれました。そのとき、私は、すごくうれしかったです。少しでも、おばさんの役に立てたかと思うと、だんだん、いとこが産まれるのが楽しみで、待ち遠しくなりました。

そして、四月に入り、おばあちゃんが、赤ちゃんが少し、早めに産まれそうだと私に、言いました。「どうしよう、小さく産まれてきたら、おなかの中で赤ちゃんはどうしているだろう。」とか、いろいろなことが頭をよぎりました。でも、こればかりは、どうしようもできません。ただ無事を祈るばかりでした。

四月二十七日、今日、産まれるかもしれないと聞いて、何度もおばあちゃんに電話をしました。そして、二十七日の深夜、待ちに待った赤ちゃん、碧空が誕生しました。

知らせを聞いた私は、心から喜びました。無事に産まれてきてくれたこと、それが嬉しくて、私が産んだわけではないけれど、どうしてこんなにうれいんだろうと思いました。

いとこできて、初めてわかったことがあります。それは、赤ちゃんが、産まれるまでに、みんなが、笑った



### 「あいさつって大切なこと」

駒込小学校 6年生  
つかもと あかね  
塚本 朱音



わたしたち六年生は、去年の六年生から受けついで「あいさつ当番」を五年生の三学期からやっています。

先生に「今度からあいさつ当番をやってもらいます。」と言われたとき、何でやらなければいけないのかと思いやる気がありませんでした。一番最初に当番であいさつをした時は、はずかしくて小さな声でしか出ていませんでした。わたしたちの前にやっていた去年の六年生を私は思い出しました。正門のところで元気よく大きな声であいさつをしていました。わたしはあいさつをされたとき、なぜかはずかしくなってしまうと、小さな声でおはようございますと言いました。だけど朝、気持ちの良いあいさつをしてくれてうれしくなりました。そしてその気持ちを新しく入ってきた一年生や二年生から五年生に分かってもらいたくなりました。だから少し大きな声であいさつしたら、五年生の子が大きな声で、「おはようございます。」と、返してくれました。それはわたしが去年の六年生にあいさつされた時と同じ気持ちでした。その時わたしは自分も相手も大きな声で元気よくあいさつすると、ふたりとも気持ちが良くなる、と気付きました。これからはこのことを忘れず、朝にびつたりすがすがしいあいさつを心がけてやりたいです。

また、マンションによくあいさつしてくれるおばさんがいます。このことをお母さんに言うと、「あいさつをすると、マンションの中にどろぼうが入ってこなくなるんだよ。」と教えてくれました。初めはよくわかりませんでした。また、あいさつには不思議なパワーがあるんだなと思いました。今までは、人にあいさつをされてから自分もやるというようにしていたのでこれからは自分から進んであいさつをしたいなと思っています。なので学校でも自分からあいさつをしたいです。

ある日の全校朝会の時、校長先生のお話のテーマは「あいさつ」。あいさつは不思議なことということです。家族と友達と先生に言うあいさつを使い分けているということです。例はさようなら。家族にはどんなに遠くはなれることになっても、どんなに長い期間合わなくなるとして、さようならとは絶対に言いません。やっぱり不思議です。

私はあいさつとことばはにていると思います。やさしい言葉をかけられるとうれしくなります。だからわたしはたくさんの人にやさしい言葉をかけたいです。そしてみんながやさしい言葉を持てば、この世の中すべてが明るくなるかもしれないし、いじめなど人の心がぎずつくことがなくなると思います。まずは自分から実行していきたいです。そうすれば明るい未来があると思います。そして、世界にいるすべての人の心が広くなり、豊かになれるように努力していきたいなとわたしは思っています。

り、泣いたり、喜んだり、悩んだり、する意味です。自分の子どもを心から大切にしたい、育てたいという気持ちでした。おばさんは、私の家のペットが死んでしまったとき、涙を何リットル流しても足りないくらい一緒に泣いてくれました。ペットを我が子のように思ってくれたからだと思います。

自分の子に対する「心」がないと、つらさにも耐えられない途中であきらめてしまうかもしれません。でも、子どもを思う「心」があれば、どんなことにも立ち向かえるし、怖いものはないと思います。虫だって、花だって、鳥だって、生きているものすべて命があります。人が人を想う「心」が命をつなげてきたのだと思います。そして、自分の子を一人前に育てることが命を育てる役目だと思います。



### 「傷つけられる動物たち」

千川中学校 3年生  
はしもと  
橋本 あかり



先日、テレビで衝撃的なニュースが報道されていました。そのニュースとは、東京・八王子市で去年十二月から猫が刃物で切りつけられる事件が相次いでいるというものでした。背中や耳を切られた猫たちは、何かを訴えるような目で、テレビの向こう側からこちらを見つめていました。私は、テレビ画面から目が離せなくなりました。同時に心がズキズキと痛みました。

人間が人間の力に太刀打ちできないような弱い動物を傷つけたという事実は、私にとってとても信じ難いことでした。傷つけられた動物たちのことを考えると、本当に悲しい気持ちになりました。また、動物を傷つけた非道な人間に対しても、違った意味で悲しい思いを抱きました。

今回の事件によって猫たちは、外傷を負うと共に、目には見えない心の傷も沢山負ったことだと思います。目に見える傷はいつか治っても、目に見えない心の傷を治すには長い年月を必要とする場合があります。それは、私たち人間にとっても同じことだと思います。動物たちの心の傷を作らせる原因は至る場面に転がっています。例えば、ペットを飼い主の都合で捨てるような行為も、今回の事件に及ばずとも、その動物に大きな心の傷を負わせることだと思います。現在、国内の保健所では何万匹もの捨て犬や捨て猫を収容しており、その内の多くは安楽死の運命を辿るそうです。

動物たちの体や心、そして命は、私たち人間と同様に大切にかけがえのないものです。小学生の頃、草野心平さんが書いた「魚だって人間なんだ」という詩を読み、動物に対する考え方や見方が大きく変化しました。

たらふくエサをやればいいといふもんちゃあない  
二日も三日もエサをやらないのもいけな  
向こうの身になって  
たまにはキャベツやコーンフレークもい  
向こうの好き嫌ひも考えること  
魚だって人間なんだ

私は、彼の思いや考え方に共感する部分が多くあります。草野さんのいう「人間」には、魚も犬も猫も、風も水さえも含まれるのです。そう、みんな「人間」なのです。誰もが、草野さんのような思考を持って、動物に接することができるようになれば、動物や人間にとって最良の形で共存が実現できると思います。

誰もが、頭では分かっていることだとしても、実際には身近な所にも動物の命を軽視している人が少なからずいるのです。私たちは動物に対する接し方について今一度考えてみるべきなのではないでしょうか。



### 「小さな活動から」

千川中学校 3年生  
こいけ ゆい  
小池 優衣



私の通う千川中学校では、生徒会活動の一環としてペットボトルキャップ回収を行っている。この活動はおよそ一年半前、私が生徒会役員になってから新しく始めたものだ。千川中学校では以前からユニセフ募金が行われていた。しかし、校則で学校に本当はお金を持ってきてはいけないし、みんな自分のおこづかいを削って募金をすることに少し抵抗があるようで、なかなか集まらないという現状だった。何か他の方法で、世界の貧しい子供達を救えないだろうかという生徒会役員会で話し合った結果、ペットボトルキャップ回収することになった。ペットボトル入りの飲料水はみんなよく飲み、普通なら捨ててしまうキャップの回収ならみんな気軽に取り組んでくれるのではないかと理由だった。第一回目の回収は三日間、登校時に校門の前で行う短期間の活動だった。しかし、予想以上に多くの人々が参加してくれて、重さにして15.35キログラム、数にして約7,675個ものキャップが集まった。このキャップでポリオワクチンなら28本、BCGワクチンなら81本購入出来る。私はこの時、こんな小さな取り組み、そしてほんのわずかな思いやりの心で人の命が救えるということを実感した。

今もこの地球のどこかで、貧しい国の子供達は亡くなっている。もし、ワクチンの接種が出来れば命を落とすことはなかったかもしれない。命が失われてしまったら、もう友達と遊び笑い合うことも、勉強することも、それに辛い、悲しいと思うことさえも出来なくなってしまう。そんな大切な命が少しの意識で出来るキャップ回収で救えるなんて、本当に素晴らしいことだと思う。

そして、生徒会役員になってから一年経ち、私は新たに生徒会長となった。選挙公約にペットボトルキャップ回収を活動にすることを掲げ、現在も回収を続けている。いつでも、好きな時にキャップを持って来てもらえるように昇降口に回収箱を設置しているが、私に直に「はい、キャップ!」と大量に持って来てくれる人もいる。中には家族や親戚、親の仕事場の人からキャップを集めてくれる人までいる。このような思いやりの優しく温かい気持ちで、千川中学校から心の輪、命の輪が広がっていったらいいと思う。

